

中、空襲にこそ遭ったものの地上戦の経験はなかった。ビルマやフィリピンの死闘と比ぶべきもない。ましてサイパンや硫黄島の玉砕に比すべきもない。特攻隊や特殊潜航艇の乗組員と比ぶべきもない。一言に「運隊」で解決できるものでもない。五体満足で復員できた身の幸せを感謝し、戦死病者の冥福を祈るのみである。

南洋（独混第十一連隊）

エンダービー守備隊

岩手県 佐々木 文治

今次大戦が終結して五十余年、敗戦国日本は戦後非常な経済発展を遂げ、世界の先進国となりました。終戦以後の困窮した生活に耐え忍び、そしてその脱出のために非常の努力を傾けたものです。

今、その復興の苦難の年月の様子は一つも見受けられません。戦争中、私共は戦いの前線に送り出され、

敵弾の中をかいくぐり、そして戦死をし、負傷もし、病苦にも悩まされ、幾多の苦難に耐えて来た。

私達が今、斯く在る身を感じする意味におき、戦争における生と死を直視し、戦争の悲惨さを後世に残したい思いを込め、申し上げる。また、生死を共にし、平和をこい願ひ、そして、私達と行動を共にして、不幸にも散った戦友達に思いを致し、日本が永遠に栄えることを確信し散った英霊に鎮魂の合掌を捧げたいと思います。

私達の民族の中に流れている「平和とは何か」を、後世に伝えたいものです。多くの方々には知られざる元独立混成第十一連隊の、内南洋の孤島エンダービー諸島及び、第三十一軍（備）関連の戦についても申し述べたいと思います。

そのためには、第三十一軍とは何であり、どこでいかに戦ったのかについての記録、資料を記載する必要があります。その戦闘序列・部隊略歴、部隊行動はいかなるものであるかを申し上げます。

旧日本の内南洋群島は、第一次大戦において、独乙の領土であったものを、先勝国日本が委任されて統治した地域です。

私の部隊は、歩兵第三十一連隊、第三大隊第三機関銃中隊で、現在に至りましても東北各地で戦友会を催しております。東北の第八師団管区（弘前）、第八歩兵団は、歩兵第五連隊（青森）、歩兵第十七連隊（秋田）、歩兵第三十一連隊（弘前）であり、他に第八師団として、野砲兵・工兵・輜重兵の各第八連隊。他に通信隊・兵器勤務隊・制毒隊・病馬廠・防疫給水部・第二・第四野戦病が隷下部隊としてあり、満州に駐屯していました。歴史ある（明治三一・一〇編成）甲編成師団でした。しかし、大東亜戦域も拡大し、満州の諸部隊も南方へと転戦・移動することになったと言われています。

昭和十九年二月二十一日、私には細かいことは分からないのですが、戦後、戦友会の資料によりまします、関東軍大陸令に基づき「ろ」号演習が下令されました、満州から、第一〜第七派遣隊を編成派遣をするこ

とになりました。特に関東軍（日本の精鋭・精強）では、派遣編成を、なるべく優秀な者と、努めて南方作戦に応ずる訓練を行わしめること、また、定数の二倍の装備を持たせることになっています。

二月二十四日、我が部隊である満州第二七三部隊（弘前歩兵第三十一連隊）に動員下令され、第三派遣隊（第八歩兵団）第三大隊となる。

二月二十五日、編成が完結し、我が第三大隊は、大尉鈴木四郎大隊長以下五八七人でした。

翌二十六日、実にあわただしい日程で、完全軍装で綏遠駅を出発したのが日暮れの十八時であり、貨車輸送で兵員は満載で発車しました。これは、先程申ししたように「ろ」号演習参加のためと言われ、行先などももちろん知らされていませんでした。

二十九日、鮮満国境通過、防諜・秘匿のため、我々は箱詰めされ、人家のない所で夜間停車し、用便のため下車するだけでした。

三月二日、釜山に到着したら、防寒軍装は脱がされ、代わりに、半袖・半袴の被服に着替えさせられま

した。これは南方方面行きか、と察知はするも、どこへ行くのか行先は知れず。

翌三日、釜山港にて、陸軍輸送船「第一真盛丸（五、八六三トン）」に乗船しましたが、五隻によって船団を組み、釜山出港。四日には門司寄港、直ちに出境という。

三月八日、横浜港に寄港、四日間停泊したのですが、その間、一般将兵は甲板に出ることを禁じられました。その日、第三派遣隊長の保井龍男大佐が着任されました。輸送船団名は「東松二号船団」でした。輸送船は十二隻、護衛艦九隻、護衛機六機。

船団指揮官は第十一水雷戦隊司令官高間少将、輸送指揮官は海陸軍船舶隊長今野大佐。派遣隊は第一・三・五・六・八各派遣隊。

各派遣隊の編成は次である。

第一派遣隊 五隻 サイパン島行き―三月十九日上陸。

第三派遣隊 一隻 エンダービー諸島行き、総員、

二七六九人（我が第三大隊は、五八七人と記録されている）。第八歩兵団司令部・歩兵第五連隊第

一大隊・歩兵第十七連隊第一大隊・歩兵第三十一連隊第三大隊・野砲兵第八連隊第三大隊・工兵第八連隊第三大隊）

第五派遣隊 一隻 バカン島行き 総員、二一五〇人（三月十八日上陸）

第六派遣隊 二隻 グラム島行き（三月二十日上陸）

第八派遣隊 三隻 トラック島行き（三月二十五日上陸）

護衛艦隊（二等巡洋艦外計九隻）龍田・国陽・野分・潮見・夕風・卯月・平戸・測天・巨清・第二〇号掃海艇）

三月九日、海軍第二二七設営隊（隊長海軍少佐岡本昭夫）九四三人、エンダービー諸島に上陸。

三月十二日、横浜出港、船団部隊は〇四時、木更津沖隻合地出撃、サイパン島に向かう、我が第三派遣隊

護衛艦は「測天」。

三月十三日、〇三時一五分 八丈島の二四七度四〇哩において「龍田」「国陽丸」は米潜水艦の雷撃を受け撃沈される。

出港当初、我が乗船「真盛丸」は船団後方を前進中でしたが、先頭船団が消滅したため先頭を南下することとなった。そのため、夜明けと共に対潜監視の任に就くようになる。と同時に、日本の陸地も次第に遠くようになり、いよいよ戦地に向かう気概がわいて任地に向かったのです。

三月十五日、南下するに従い暖かさを増して、船内が蒸し暑くなり、輸送船のエンジンの音が船内に響き、蒸風呂のようでした。船内は蚕棚のように上段・下段ともにぎっしりの満員で、足の踏み場もありません。五燭光位の薄暗い電灯の下、身動きもできぬ状態でした（戦時中輸送船に乗った人は誰でも体験した、苦しい状態）。そのうえ、船酔い兵士が続出し、残飯の量が日増しに多くなりました。

三月十八日、我が第三機関銃中隊も対潜監視の任に就く。第五派遣隊はパカン島に上陸する（第十二師団、満州渾春）。

三月十九日、第一派遣隊サイパン島上陸す。我が第三派遣隊はサイパン島寄港、甲板より、久しぶりに陸地を眺める。青々とした緑の山、海岸線の椰子の実を見て、南国へ来た感じである。いよいよ目的地の守備に就けると喜んだが、上陸命令なし。

三月二十日、我が第三派遣隊は更に南下、第六派遣隊はグアム島上陸、第十一師団の兵隊で満州虎林・孫呉で編成と聞く、四国出身者の部隊。その時、第四艦隊情報でニューアイルランド諸島東方に米機動部隊出現。

三月二十一日、「四艦情報 午前五時四十五分、ポナペ島、一八〇、二四哩、集団敵部隊電波聴取す」と。

三月二十二日、「四艦情報 敵状況変化なし。エンダービー諸島上陸は明日と初めて知らされる、いよいよ上陸だ。

三月二十三日、エンダービー諸島に上陸す。洋上に遠く島が見え、左端に灯台も見えて来た。午後、南側リーフ外に輸送船停泊、護衛艦「測天」は護衛の任を解かれ、四月一日、無事横浜港に帰港と後に聞く。

「真盛丸」より縄梯子にて大型発動機艇（通称大発）に移乗上陸。

第一大隊はアール島南浜（青森）、第二大隊はポロアルト島とサウ島（秋田）、第三大隊はアール島内海東浜（岩手）、野砲大隊はアール島棧橋南、工兵中隊は棧橋北側にそれぞれ集結した。総員二、七六九人は全員無血上陸を完行したのである。

二月二十四日、我が隊は正式には、第三十一軍所属・混成第三派遣隊（柏第二五五三部隊）第三大隊第三機関銃中隊鈴木隊・菅野隊であり、軍事郵便の宛名・守備配置、宿舎の構築設営、揚陸作業の行動が開始されたのである。

三月二十五日、上陸当初から機関銃隊は、第三大隊本部よりおよそ五〜六〇メートル離れた東南方向のジャングルを切り開き、保健衛生を考慮し、椰子の木

を使い高床式に基礎造りし、床にはマングロップの根を敷き詰め、その上に八角の天幕を張って住居を作り、起居しながら警備の任に就く。

次にエンダービー諸島の状について申し上げる。

同島は、トラック島の西方約一八〇哩、北緯七度二分、東経一四九度二分に位置する「ポロアット」「サウ」「ツウ」「エラゲラップ」の五珊瑚島からなり、各島とも、ほとんど砂地で平坦、中央部は湿地を形成している。海岸は距離一〇〇メートルにわたり珊瑚礁で形成されていて、「サウ」「エラゲラップ」間に水道があり、この水道が唯一の小船水路である。河川はなく、ヤシ・パン・タロ芋が食用になる。

アール島には、エンダービー海岸派遣隊特設見張り所（第四六望楼）がある。アール島で一番高い所でも、二・四メートル位で、満潮時ともなれば中央部は三〇〜六〇センチの湿地帯を形成し、一握りの土もなく、島民約四七〇人が住んでいた。

ちょうどその頃の三月三十一日には、山本元帥に次

古賀峯一連合艦隊司令長官が、司令部幕僚三人が行方不明となった。

翌四月一日、いよいよアール島飛行場建設が開始された。その規模は、幅五〇メートル、長さ一三〇〇メートルの滑走路であり、海軍第二二七設営隊で約一〇〇〇人近い兵力である。我が第三派遣隊の第一・第三大隊の主力を投入し突貫工事を行った。

四月十日、米軍機一機、初空襲、機銃掃射を受ける。

四月十一日、補給輸送船三隻来島、午後、揚陸作業、夕方、米軍機四機来襲、低空飛行にて機銃掃射を受ける。我が上陸部隊は対空射撃をもって応戦する。うち米軍一機、海軍の機関砲にて撃墜する。墜落米軍機は南の洋上より、サウ島上空をかすめて内海に突っ込む、米兵二人戦死、外一人捕虜として連隊本部に送る。この捕虜は数日後、トラック島に移送された。我が方損害なし。

四月十四日、防空壕の構築命令来る（数度の空襲により今後を考慮してか）。

四月二十七日、風土病 Dengue 熱（高熱）患者発生し、なおも蔓延のため患者続出し、使役に不出られぬ者多くなる。

四月二十八日、アムバー赤痢患者発生、便所に行く回数多くなる。このため体力衰弱し、甚だしきは死に至る。

五月四日、遂に、我が大隊戦病者が出る。アムバー赤痢による死亡者である。我が第三大隊の戦病者は二二人であるが、初めての戦病者である。

（我が機関銃中隊―佐々木兵長、第十中隊―浦田兵長）
五月五日、第十中隊佐々木鉄治上等兵、北浜海岸監視歩哨が、機雷爆発のため戦死。

五月二十日、三カ月分の携行食糧も少なくなり、七割減食となる。上陸以来、切干大根と粉末噌と米食であったが、次第に減量されてきた。飛行場建設が早朝より夜までの突貫工事で、 Dengue 熱・アムバー赤痢の二重、三重の悪条件に加えて減食であり、兵士達は次第に衰弱していった。上陸以来わずか三カ月で、このような状態である。南海の孤島ゆえ、食糧の生産は

皆無である。まさに「座して食えば、泰山も空し」の言葉通りで、前途の苦難が予想されていた。

五月二十二日、軍令陸第五八号により、第三派遣隊は、トラック集団、麦倉集団長の指揮下に入ることとなった。

五月三十日、B 24（コンソリデーテッド重爆撃機）二十機来襲。アール島、爆撃を受ける。全島の樹木、幕舎、防空壕等吹き飛ばされる。岡田隊三人戦死。空襲時刻一一時四〇分。いよいよ孤島とたることも覚悟しなければならぬか、と思う。

五月三十一日、米軍グラマン戦闘機二機来襲す。岡田隊一人戦死。来襲時間は短時間で飛び去る。

六月一日、独立混成第十一連隊編成下令。

六月七日、我が隊は、五月二十二日、トラック集団となったため、新部隊、独立混成第十一連隊として編成が完結した。軍事郵便は横須賀気付「ウ」四六、通称号は、備第一七五八五部隊となる。

部隊編成は、大隊本部―鈴木隊、第七中隊―水口隊（千田・市川・松村各小隊）。第八中隊―繁田隊（佐

川・津野・青木各小隊）。第九中隊―岡田隊（後藤・小田中・佐藤各小隊）。重機関銃隊―菅野隊（小林・広川・竹林・鎌田各小隊）。大隊砲隊―盛隊（加藤・大河原・佐々木・岩瀬各隊）となった。

六月九日、米軍グラマン戦闘機の機銃掃射を受け、岡田隊一人戦死、菅野隊の佐藤又吉兵長戦病死。

六月十五日、サイパン島に米軍上陸し、同島守備隊は七月八日の午後のバンザイ突撃にて玉砕す（後日の情報で知る）。

七月十二日、エンダービー諸島派遣の設営隊八八六人トラック島に転進する。部隊は三回にわたり、金曜島・木曜島に転進、七月二十日完了する。

七月二十一日、グアム島に米軍上陸開始、八月十日、当島守備隊玉砕する（後日情報にて知る）。

七月二十五日、動員編成完結。七月二十七日、満州第二七三部隊（第三十一連隊主力）綏西を出発、南方軍指揮下に入る。

八月二十四日、第三十一連隊乗船の輸送船（戦車第

二師団一部を含む)「福領丸」が魚雷攻撃を受け、七十二人戦死す。午前七時四分、台湾沖五キロの洋上で、魚雷二発命中し負傷者二十人。

エンダービー島の食糧事情はますます悪化しつつあった。

九月十九日、エンダービー、独立混成第十一連隊第一大隊、菅原大尉(青森)以下五四〇人、トラック島秋島に転進を命ぜられる。その後四回にわたり転進し、九月二十七日、転進を完了し、第五十二師団(柏第四六五〇部隊)の予備隊となる。

十二月二十四日、米軍、硫黄島に上陸開始、同島は、翌二十年三月十七日玉砕と後日聞く。米軍は、順次北上し、日本本土を目指す如き作戦であったと戦後聞く。

当、エンダービー部隊は取り残され、空襲も受けることがなくなってきた。しかし、食糧の生産も、補給もなく、栄養不足の将兵は体重が三五〜四〇キロの平均となり、昭和十九年の年末を迎えねばならなくなかった。

そのため、現地の自活の徹底が叫ばれるようになった。しかし、珊瑚礁の島であるから土もなく、イモもカボチャも育たなかった。「ネズミ退治」の命令が出て、ネズミを獲って炊事係に提出し、貴重な蛋白質とし食糧としていた。

また、ヤシの実及びヤシ筍を食料としたので、ヤシの木は一本もなくなってしまった。その他、草の葉・茎等を採集し現地自活用に食い荒らしたので、雑草もほとんどなくなった。

他に「カタツムリ」「ヤドカリ」「木くらげ」「シダの芽」「トカゲ」など、あらゆる物を探して食していた。

二十代の若者が杖をついて、空缶をぶら下げて食物を探したのである。目玉だけをギョロ、ギョロさせているので、さながら骸骨が歩いている風であった。

十二月二十日までの戦没者は四十数人となる(第三大隊の推計)。

十二月三十一日、エンダービー諸島にての年越しである。年越しと言っても、食料も乏しく、体力も衰弱

し、また、戦闘能力等もなくなった。まさに餓死寸前の状態で昭和二十年の新年を迎えることとなる。

昭和二十年一月一日、エンダービー諸島で迎える元旦、給与といっても食料は、小さい四角の乾パン三枚であった。

お米もなく、乾パン三枚が無常のごちそうであった。その後、食料は自分で探し求めなければならない状態であった。ますます栄養失調者が続出する状態である。

一月二十三日、連隊長、保井大佐の訓話「部隊は、戦争を続行するための現地自活に一層の努力をせよ」と、アール島に在住の部隊兵員を、北側広場に集合させての訓話だった。部隊長自らも空腹の中、隊員に訓話をするのは辛いことであつたらう。しかし、補給なき現況では、現地自活に努力する以外方法はない。自らの食は自らが作らねばならぬという、悲しいと言いか、情けない状況であつた。明日への命をつなぐため、我々は現地自活に勢いを出すより仕方がなかつた。

一月二十五日、トラック島に、鈴木大隊長、大隊本部、岡田中隊（第九中隊）は、日没後、トラック島に掃海艇にて転進する。

一月二十七日、トラック島夏島に上陸する。その後、我が第三大隊は四次にわたってトラック島に転進する。

第一次 一月二十七日 第三大隊本部と岡田隊（夏島）

第二次 二月一日 菅野隊（夏島）

第三次 三月六日 繁田隊・大河原小隊（水曜島）

第四次 三月七日 水口隊・加藤小隊（水曜島）

後続転進中隊が、二カ月も遅れて転進したので、後続転進中隊に多くの餓死・戦没者を出した。二月は三十二人、三月三十五人、計六十七人（第三大隊において）。

一月三十日 ト集団作戦令甲第一〇八号により、第五十二師団（師団長麦倉俊三郎中将）直轄（第二予備隊）となる。

戦略については次の如くである。

自 昭和二十年一月三十日、至 同年六月三十日
第八次 トラック島付近の戦闘に参加、

二月一日、トラック島夏島に上陸、仮設小屋が出来ていて、板の間があった。また、給与も米半分にサツマイモ半分の給与で、サツマイモの茎と葉の味噌汁で、すごいごちそうであった。

各隊は現地生活班を編成して、サツマイモ・タピオカ・オクラ・トウモロコシ等を栽培した。パン・マンガ・パイア等も自生していた。さらに生の大きいカツオ等も支給になった。前の生活とは雲泥の差であり、ここで、兵達も自活の自信がわいてきたのである。

トラック諸島は、昭和十九年二月十六、十七、十八の三日間、米軍の大空襲を受け、ほとんど地上施設、あるいは海上船舶、艦船が大打撃を受け壊滅状態であった。

六月十五日、あれから四カ月半後のこの日、今度、連合軍の英機動部隊がトラック島に来襲した。艦

砲射撃六〇〇発、艦載機六〇、空母二隻、巡洋艦四はか（数は戦後の調査により知ることが出来た）の兵力であった。

その後、トラック諸島は置き去られ、戦線は、日本本土及び、その周辺に移っていったので、その戦況は十分知らされていませんでした。

しかし、八月六日、米軍のB 29は、占領したテナアン島より出発、広島、長崎へ原爆を投下したという。

八月十四日、日本は無条件降伏終戦。

八月十五日、天皇陛下終戦詔書の玉音放送（我々は直接は聞けず）。

十二月十六日、第三大隊、トラック島夏島より、米軍LS艇乗船。

十二月二十六日、神奈川県浦賀港入港上陸。

十二月二十九日、召集解除、復員完結、部隊解散、このようにして、私は故郷に帰ることができました。

食糧なき孤島の将兵は、年内に内地帰還が急がれました。それに引き替え、満州からシベリアへ強制抑留、重労働された人々は何年も後に内地へ帰ったこと

を今も思い、戦友会を結成し、平成十二年六月九日は、釜石で第二十二回の戦友会を開催しております。

運命か、ニューギニア

五十一師団生き残り

群馬県 温井 一衛

昭和十七（一九四二）年三月卒業予定で宇都宮高等農林学校に学んでいた私は、時局重大な折から繰り上げ卒業となり、昭和十六年十月に卒業し、父母と妹三人と弟の六人を残して昭和十七年二月一日、高崎の東部第三十八部隊（歩兵第一一五連隊補充隊）に入隊しました。

留守宅には父のほかには男手がなくなり、どうなるのか心配でしたが、妹三人が力を合わせて家業の農業を引き継ぎ、米・麦・野菜の耕作に励んでくれることになり安心して入隊できました。

当時の日本は開戦早々の大戦果に酔っていました。

高崎の連隊は強豪第十四師団の一角を担う伝統部隊で、満州チチハルで対ソ戦に備えており気合十分でした。

内地留守隊でも初年兵教育は厳しいものでした。三カ月の一期の教育が終わると幹部候補生を命ぜられ、三カ月の特別教育のあと甲種幹部候補生を命ぜられ、下級将校としての教育訓練を受けるべく、五月十日、前橋陸軍予備士官学校に入校、相馬ヶ原で過酷な教練を受けました。

その頃南方海上では、六月五日に帝国海軍がミッドウェーにて大敗北を受けていたとは夢にも知りませんでした。当時は極秘で我々が知るはずもなく、対米英戦に備えて相馬ヶ原の原野を駆け回っていました。

十月に同校を卒業、見習士官となり、第五十一師団（基）歩兵第一一五連隊勤務となりました。昭和十七年十二月、第五十一師団は南方派遣となり、十二月二十五日、宇品港を出港、三十一日、九州佐伯港で八隻の輸送船団を編成し出港、ラバウルに向かいました。当時ガダルカナルの戦況は厳しく撤退寸前の戦況でし